

【査読論文】

「奥武蔵」の誕生

加藤寛之*

キーワード：奥武蔵、武蔵野鉄道、西武鉄道、飯能、吾野

はじめに

「池袋」駅から西武池袋線に乗り1時間で着く「飯能」駅は、ハイキング適地「奥武蔵」の入り口だといえる。この「奥武蔵」という語句とイメージは、武蔵野鉄道（現西武鉄道）が取り組んだ観光開発の成果である。筆者は当地の近・現代の諸事項を整理・再検討し、後世の研究の便に資することを目的にした資料の収集と整理を行っている。そのなかで「奥武蔵」という語句について、武蔵野鉄道が観光開発の用語として創造し用いることで種々の変遷を経ながら今日のイメージを獲得したものであることを、あらためて考察したものが本稿である。

「奥武蔵」の語句と武蔵野鉄道の関係は、これまでにほとんど考察されたことがない。飯能市史編纂に従事した経歴をもつ浅見徳男が『飯能の住民が燃えた時－武蔵野鉄道と観光開発－』で「大いに関係がありそうである」と言及していることが唯一であろうが、そこに論考や資料の提示はなかった。また、飯能市が市史編纂事業で刊行した飯能市史編集委員会『飯能市史資料編Ⅺ 地名・姓氏』の地名索引に「奥武蔵」はみられない。

本稿はこの「奥武蔵」という語句の形成と範囲について、当時の出版物や資料を基に帰納的な手法で名称誕生と今日あるイメージを獲得する初期段階までを概観する。

1. 「奥武蔵」の語句の現状

埼玉県の西部を走る西武池袋線と西武秩父線沿線の山間部を紹介する旅行案内書や山歩きのガイドブックは、例えば「奥多摩・奥武蔵」「奥武蔵・秩父」のように、ごく普通に「奥武蔵」という語句を用いる。「奥武蔵」はこの地域を表す語句であるが地名では存在せず、西武池袋線と西武秩父線沿線の山間部を表す観光案内の語句として用いられることが多い。

「奥武蔵」の行政上の用例では、埼玉県が昭和26年（1951年）3月9日に「県立奥武蔵自然公園」を指定したことが早期の例であろう（図1.1）。近年の例では、飯能市が山間部にあった小学校3校を統合する施設隣接型小中一貫の新校を「奥武蔵創造学園 飯能市立奥武蔵小学校」と命名して平成31年（2019年）に開校しており、「奥武蔵」は行政上でも用いられる語句である。

* 城西大学広報課長



図 1.1 「県内の自然公園の概要」
出所：埼玉県Webページ「埼玉県の自然公園」埼玉県ホームページ
(<https://www.pref.saitama.lg.jp/a0508/shizenkouen/midorishizenka.html>, 2020年11月22日閲覧)

2. 武蔵野鉄道のハイキング勧誘

現在ではごく普通に用いられる「奥武蔵」は、昭和初期に創出された語句である。種々の記述から命名者は武蔵野鉄道とみられるが、「奥武蔵」についての明確な宣言や定義の類は見当たらない。

昭和44年（1969年）発行のハイキングガイドブックである岳朋会『奥武蔵』に次のようにある。

「奥武蔵という名称は、それほど古いものではなく、昭和に入ってハイキングが盛んになりはじめた当時に、その頃の武蔵野鉄道がこの名を使い始めて宣伝してからである。」

武蔵野鉄道は、現在の西武鉄道の前身である¹。「奥武蔵」の語句が武蔵野鉄道とハイキングに関係していることは、昭和39年（1964年）に坂倉登喜子「奥武蔵からヒマラヤへ」でも記述している。坂倉登喜子はハイカーである。

「奥武蔵という名がつけられる以前、武蔵野電鉄が、この地方の開発に力を入れ、奥多摩の溪谷美に対して、丘陵と峠と山村の佳さを持つこの地域に、武蔵野の奥山「奥武蔵」という名をつけて、世に広く紹介されて以来その発展開発は目覚ましいものがあった。」

武蔵野鉄道は汽車でなく電車であることを表現するために社名と異なる「武蔵野電車」を自称しており、文中の「武蔵野電鉄」が武蔵野鉄道であることは明らかである。

1 武蔵野鉄道については、飯能市郷土館（2015）『西武鉄道飯能池袋間開通100周年記念特別展武蔵野鉄道開通』が丁寧にまとめている。

太平洋戦争前から奥武蔵の山や集落を訪れていた神山弘は、神山弘・新井良輔『増補ものがたり奥武蔵 伝説探訪二人旅』で次のように記述している。

「「奥武蔵」の名は西武鉄道が付けたというのが本当らしい。なにしろ太平洋戦争の始まる前の半世紀以上昔なので、確実なことはわからないが」「もと武蔵野鉄道とっていたこの西武線沿いの山々には未だ総称名が無かった。そこで奥ばやりに乗って、武電の宣伝部あたりが命名したこれは、武蔵の国の奥というよりも武蔵野電車からとったものなのである。」

神山弘は、「奥武蔵」の名が武蔵野鉄道の命名で、武蔵野電車からとった語句であると記述しており、これは後述したい。

昭和39年（1964年）発行の奥武蔵研究会『奥武蔵』十五周年（100号）記念号所収 岩崎京二郎「奥武蔵の範囲」に、次の記述がある。岩崎は「奥武蔵」の範囲や語源を柔軟にとらえている。

「奥武蔵という地域の範囲はどこまでをいうのだろうか。これはわかったようではなかなかわからぬ問題であると思う。」

「今は絶版となり手に入り難いが、当会の大石真人氏や坂倉登喜子氏を含んで組織していた、ハイキングペンクラブで昭和の初期に出版した「奥武蔵」には筆者は総論を書き、その序めに奥武蔵考を書いたが「奥武蔵」の名のわれらの前に大きく現われたのもそう古いことではない。武蔵野鉄道（現西武鉄道）が飯能終点より山間吾野の地へ通じ木材石灰石その他の貨物運搬を重とする経営より、勃然と起れる登山ハイキングの動向を利し、奥武蔵の汎称を与え登山ハイキングの施設を漸次伊豆ヶ岳、正丸峠、子の権現、高山不動附近の山地へ加え初めたころであったと思う。」

「ペンクラブ著の「奥武蔵」には川崎隆章氏の武甲山とその周囲を筆頭として、橋立川遡行（大門八郎氏）八嶽を繞る沢（大戸井健一氏・宮沢和秀氏）から、三ツドツケを繞る沢まで収録した。あえてこの秩父の範囲と思われる山城まで収録したのは、武蔵野いや武蔵の国の奥の意も含めてのものであったからである。」

最後に、「奥武蔵」の語句に対する地元住民の意識の例を紹介する。飯能市にある地元紙「文化新聞」昭和27年（1952年）2月28日付に掲載された「山郷雑記」に次の記述がある。

「奥武蔵という呼称が、何時、何所で、何人に依って言ひならされたかわたしは知らない。戦前原市場で、ワサビを作った人が、その包装紙に奥武蔵名産と銘打ったことは覚えているが、とに角、戦前余り古い事ではなかったらう。そして是は奥多摩にならった呼称であろう。」

3. 「奥武蔵野」の語句の存在

「奥武蔵」の語句の用例で、武蔵野鉄道の観光館案内書である大正4年（1915年）発行の山田勇雄

『武蔵野鉄道案内』の飯能町から紹介したい。同書は巻末の自社広告に「本協会は東上鉄道株式会社武蔵野鉄道株式会社より案内記の編纂及び出版を委嘱され既に之を発行したるのみならず…」とあって、武蔵野鉄道の意向を受けた案内書である。

「…武蔵野鉄道が開通して愈々東都との連絡が開始され茲に益々飯能町は発展の域に進み奥武蔵無尽の宝庫は…」

大正4年(1915年)は武蔵野鉄道が「飯能」駅まで開通した年である。当時の飯能町の行政区域は、現在の市街地部分に近い範囲である。「奥武蔵」の語句を、武蔵野鉄道の終着である飯能町の表現として用いていることに注目されたい。「奥武蔵」の語句はあるが、現在の認識される「奥武蔵」とは異なる使い方である。

あらためて、現在の認識である「奥武蔵」の語句の形成を述べたい。

飯能の遊覧地を紹介した武蔵野電車発行パンフレット「奥武蔵野 遊覧コース御案内」がある(下線筆者)(図3.1、図3.2)。表紙に3人の親子らしいハイキング姿を描いている。内面は飯能町の観光地図になっており、そこにも「奥武蔵野遊覧コース」とあり文中にも同語句が使われている。



図3.1 「奥武蔵野 遊覧コース御案内」(外面)



図3.2 「奥武蔵野 遊覧コース御案内」(内面 部分)

この観光パンフレットには製作年の記載がないが、地図から製作時期を絞ることができる。

- ・「天覧山」駅がある。天覧山駅は昭和6年(1931年)4月1日開業、昭和20年(1945年)2月3日休止である。
- ・昭和8年度(1933年度)には造成が済んだ現在の中央通りが描かれている²(図3.3、図3.4)。
- ・広告面とみられる温泉旅館東雲亭の紹介文に「昭和7年(1932年)11月23日の朝日グラフ所載の次の記事を御覧ください。」とあるので、その後ではあるが直近の製作である可能性が高い。

2 地図「消火栓之位置」の図中に「昭和八年度舗装工事施工箇所」「昭和九年度舗装工事施工予定箇所」とある。舗装は上水道管理設後でないといけないので、昭和8年度に道路が完成したことになる。これらから、昭和7-8年(1932-1933年)ころに製作のパンフレットと推定できる。この時点でパンフレットは飯能町を「奥武蔵野」と紹介している。「奥武蔵」ではない。

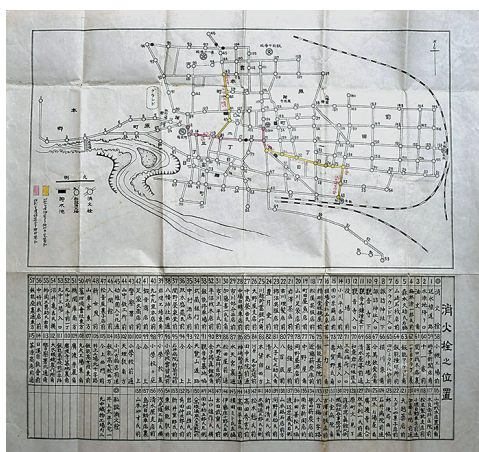


図 3.3 「消火栓之位置」(全体)

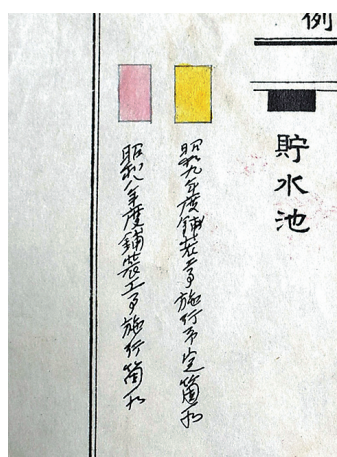


図 3.4 「消火栓之位置」(部分)

類似の武蔵野電車発行パンフレット「飯能 天覧山」がある(図 3.5、図 3.6)。表紙は天覧山頂上の展望台を描いている。これも内面は飯能町の観光地図になっており、そこにも「奥武蔵野遊覧コース」とあり文中にも同じ語句が使われている。このパンフレットは文中に「昭和12年(1937年)5月同軍戦跡の天覧山麓に」とあることから、それ以降の製作である。

観光パンフレット類は、現在のそれと比べて記述等が寛容であって正確性に疑問は残るが、「奥武蔵野」の語句が存在したこと、「奥武蔵野」が飯能町をさしていたことがわかる。



図 3.5 「飯能 天覧山」(外面)



図 3.6 「飯能 天覧山」(内面 部分)

4. 「奥武蔵」の語句の形成

このころ、武蔵野鉄道は事業拡大を進めていた。昭和4年(1929年)9月に「飯能」駅から「吾野」駅まで線路を山岳部へ延伸、通称吾野線(以下、吾野線)が開通した。「吾野線は、乏しくなりつつあった青梅地方に代わる石灰石の供給地として吾野を当てたいとする大株主の浅野セメントの意向が強く働き、採算を度外視して建設された」。「またこの時期、武蔵野鉄道は奥武蔵高原など低山地

帯のハイキングの宣伝に力を入れ始める」^{3,4}。

武蔵野鉄道の観光開発の関心は、吾野線の延伸に伴って、飯能町から、より奥地の吾野へ向いたと推定される。

観光開発の関心が飯能町から吾野に向いたことを推定させる一例を示す。前述の武蔵野電車「奥武蔵野 遊覧コース御案内」の文中に「関八州の展望多峯主パノラマ臺」とある。一方、武蔵野電車発行パンフレット「奥武蔵の雄 伊豆ヶ岳 奥武蔵の峠」（図4.1、図4.2）は、昭和4年（1929年）9月開通の吾野線を記載し、昭和13年（1938年）11月竣工の厚生道場⁵の記載がないことから、その間の製作と推定できるが、これには高山不動堂の奥の院に「關八州展望臺」と記載がある。関八州の呼称が、飯能町の山から吾野の山に移っている。

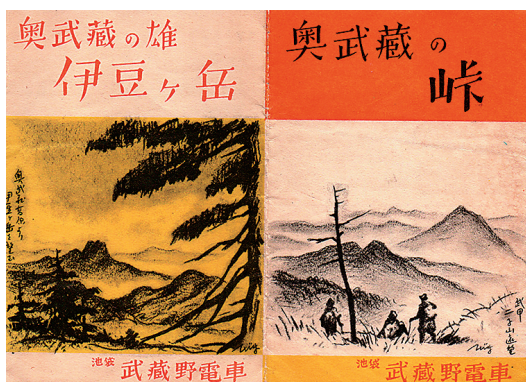


図4.1 「奥武蔵の雄 伊豆ヶ岳 奥武蔵の峠」（外面）

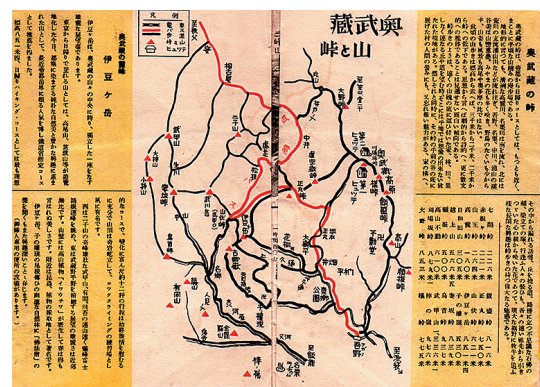


図4.2 「奥武蔵の雄 伊豆ヶ岳 奥武蔵の峠」（外面 内扉）

前述のように「奥武蔵野」の呼称が存在したのではあるが、「奥武蔵」の呼称については奥武蔵研究会『奥武蔵』奥武蔵研究会創立五十周年記念号に、同会会長の大石真人による次の記述がある。文脈から取締役とは武蔵野鉄道の取締役であるが、思いついた時期を含め真偽は不明である。

「奥武蔵という名は、戦時中に、当時の取締役で宣伝担当の某氏が刈場坂峠から丸山へ登るハイキングをしていた時、ふと思いついた名前とのことで…」

昭和9年（1934年）初めの冬に武蔵野鉄道が開業した「奥武蔵スキー場」⁶は、吾野線による観光開発で明確に「奥武蔵」を冠した施設である。神山弘・新井良輔『増補ものがたり奥武蔵 伝説探訪二人旅』の新井良輔「越生カッパ屋の聞き書帳」に「スキー場のあった刈場坂峠」の項があり、該当

3 「吾野線」は武蔵野鉄道の延伸であり、後継の西武鉄道も「吾野」駅～「池袋」駅間が西武池袋線である。だが、「吾野」駅～「西武秩父」駅間の西武秩父線開業以前には「飯能」駅～「吾野」駅間を「吾野線」と呼称することが一般的であった。

4 飯能市郷土館（2015）『西武鉄道飯能池袋間開通100周年記念特別展武蔵野鉄道開通』p.27, 29より。

5 厚生道場は、「正丸峠キャンプ場」の中心施設。昭和13年11月竣工。藁葺の日本家屋の宿泊所で豪華な山小屋だった。厚生道場の呼称は、「文化新聞」昭和29年9月9日によると「真面目な名称をつけないと連れ込み宿のように誤解」されるので「厚生省が発足したのにちなんでも厚生道場と云う至って野暮臭い名称をつけた」とある。

6 同スキー場の付属施設として「奥武蔵高原ヒュッテ」もあった。

部分を転載する。

「武蔵野鉄道は昭和4年（1929年）、飯能－吾野間を開通させましたが、折からの不況で、予定していた石灰岩の輸送も少なく経営不振になり、これを挽回しようと秩父に連なる沿線の山を奥武蔵と名付けて、ハイキングの宣伝に力をいれました。昭和11年（1936年）には正丸峠の山岳道路と、当時厚生道場といった今のガーデンハウスも完成して、一気に東京近郊のハイキングのメッカになったのですが、冬場の旅客誘致の一つとして開いたのが刈場坂峠のスキー場でした。

今まで外秩父と総称されていたこの峠道一帯を奥武蔵高原と名付け、無名の草刈場の入会地を、草刈場へ登る坂の意味から刈場坂峠と呼ばせ、さらに高原での最高峰の三角点879メートルをつつじ山と命名しました。峠にはヒュッテも建ち電気も引いて、第一ゲレンデ、第二ゲレンデと整備された名実共に奥武蔵スキー場が誕生したのです。

この辺は海拔も800メートルを越し、気温も氷点下10度ぐらいには下がるので、雪さえ降れば結構スキーを楽しむことができます。そこへ昭和11（1936年）年の大雪があったのですから、吾野駅からスキー場入口の子ノ神戸までのバスは、後部にスキーを乗せる台をつけて、満員のスキー客を運んだものでした。白銀の奥武蔵高原にスキー場の灯がまたたくのが、越生からも眺められました。

スキー場は正式には秩父郡大柵村大野の秣場でしたが、盛況だったのは一年だけで、翌年からは新聞のスキー欄にも、毎日積雪ゼロと出るしまつで、東京から一番近い奥武蔵スキー場も余り活躍の場はなく、春の淡雪のように消えてゆきました。」

文中にある「奥武蔵高原」は、吾野駅の東北方から西北にかけて約15キロの長さにわたる高原状のなだらかな尾根を呼称したもの。この間に顔振峠・飯盛峠・ブナ峠・刈場坂峠・大野峠がある^{7,8}。武蔵野電車「奥武蔵の雄 伊豆ヶ岳 奥武蔵の峠」に「奥武蔵高原」の記述があることから、「奥武蔵高原」の名も奥武蔵スキー場の開業ころに武蔵野鉄道が付けたと考えられる。

武蔵野鉄道の延伸によって、終着が「飯能」駅よりも地理的に奥地である「吾野」駅になったことが契機になって、武蔵野鉄道によって「奥武蔵」の語句が使われることになった。武蔵野鉄道の終着が飯能町である「奥武蔵野」からさらに奥地へ移動することで「奥武蔵」の語句が創出されたと推定されよう。つまり、「奥武蔵」あるいは「奥武蔵野」は、武蔵野鉄道の終着を意味する語句であると推定できる。前述した神山弘の「奥武蔵」の名は武蔵の国の奥というよりも武蔵野電車からとったものとの見解は、妥当なものと考えられる。

5. 「奥武蔵」の範囲

冒頭に述べたように、「奥武蔵」がどの地域をいうのかは判然としない。その原因は命名以降の武蔵野鉄道の観光戦略にもあった。

7 2020年現在、「奥武蔵高原」の呼称をみることはない。ほぼ同じ道筋に観光道路の奥武蔵グリーンラインが開通して名前が置き換わった。木が生長し高原感も失われた。

8 西武電車（1962）「奥武蔵ハイキング」（'62年版（37年2月））参照。

それは、昭和11年（1936年）に正丸峠を越えて秩父に至る「正丸峠ドライブウエー」が開通したことで、秩父を含む一体を武蔵野鉄道が運行するバスで吾野から行ける観光地として誘導したことが関係するとみられる⁹（図5.1、図5.2）¹⁰（図5.3、5.4）¹¹。このことで秩父方面への範囲が曖昧になった。また、「奥武蔵高原」から越生方面へ抜けるルート、寄居町から秩父を経て正丸峠ドライブウエーで吾野に至る回遊ルートをも東武鉄道と連携して観光案内したこと¹²（図5.5）で、現在は外秩父と呼称される山々との関係が曖昧になった。これには活動範囲が広い「一部登山家、ハイカーの間」で「奥武蔵」が認識されたことも関係するとみられる。



図5.1 「秋は武蔵野電車で」(外面)



図5.2 「秋は武蔵野電車で」(外面 内扉)



図5.3 「奥武蔵ハイキング 正丸峠ドライブウエー」(外面)

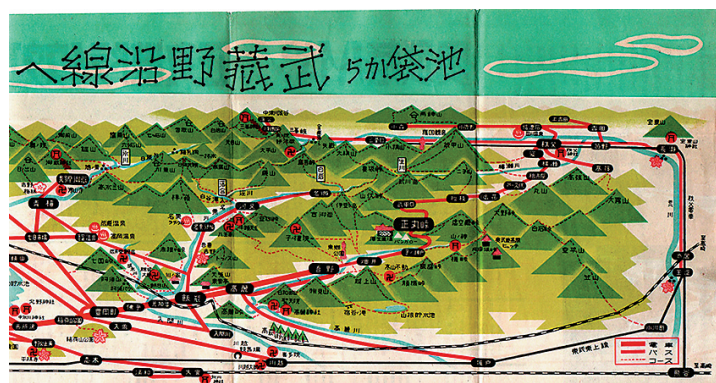


図5.4 「奥武蔵ハイキング 正丸峠ドライブウエー」(内面 部分)



図5.5 「祖國の史を訪ねて ハイキング 健康と鍛錬 東上線 池袋から」(外面)

9 武蔵野電車「秋は武蔵野電車で」参照。

10 武蔵野電車「奥武蔵ハイキング 正丸峠ドライブウエー」参照。

11 武蔵野を探る会会報（1936）「開かれた“文化の障壁” 正丸峠開通祝賀会」『むさしあぶみ』（27）参照。

12 「祖國の史を訪ねて ハイキング 健康と鍛錬 東上線 池袋から」参照。

戦後まもなくの例として、昭和21年（1946年）発行の坂倉登喜子『奥武蔵』は付図として「奥武蔵概念図」を収録し、「奥武蔵概説」に次のように記述している。

「其の山域は南面を奥多摩に隣接し、武甲山を界して秩父に至り、北面比企山系は上武国境に迄波及し、東面は緩かに関東平野、武蔵野の原に、流れ流れて高度を減じ…」

「一部登山家、ハイカーの間」の認識とは別に、「奥武蔵」の語句は、昭和25年（1950年）12月に、飯能町・原市場村・名栗村・高麗村・東吾野村・吾野村から「飯能地方自然観光地指定に関する陳情書」が埼玉県に陳情され、昭和26年（1951年）3月9日に「埼玉県立奥武蔵自然公園」に指定されたことで行政上の語句となった^{13,14}。「埼玉県立奥武蔵自然公園」の範囲は西武鉄道沿線の山という狭義の奥武蔵だったが、これによって行政的には自然公園として「奥武蔵」の範囲が明確になったといえる。自然公園の認定陳情は関連自治体への西武鉄道の働きかけがあったのではないかと推察されるが、判然としない。

「埼玉県立奥武蔵自然公園」が指定されたことが西武鉄道沿線の山をすなわち「奥武蔵」の範囲にしたとはいえ、「奥武蔵」は一般的に通じにくく地域もイメージしにくい語句であったようだ。

指定から5年後の昭和30年（1955年）発行の有竹修二『武蔵野散歩』の「奥武蔵」に、次のように記述されている。

「奥武蔵

「奥武蔵」という詞はまだ一般には通じにくいだが、一部登山家、ハイカーの間には、すでに立派に通用語になっている。殊に秩父山系中心の山々や、その山裾の村落を歩く人々の集まりとして、「奥武蔵研究会」という会が出来ている。この大石真人氏の著書「奥武蔵」は奥武蔵を明快に解説しこの地域の数々の山路のハイキングコースや山ひだにある山村聚落の習俗についてのルポルタージュを集めている。…「奥武蔵」と呼ばれる地域は、大石氏自らの定義によると、南は、東京と埼玉の県境の尾根、金子丘陵付近から天目山（1,717米）で奥多摩と連なり、西は天目山から熊倉山にいたる尾根で奥秩父に接し、その延長は荒川でつき、北上して東へ廻り北縁となり、東西は陵夷して入間野台地にいたる。これが広義の奥武蔵で、狭義の奥武蔵は、越生から都幾川の谷を登り、高篠峠から高篠川に下る線以南を指す。概別すると、狭義の部分を西武鉄道沿線の山。残余を東上線沿線の山ということが出来る。大石氏はこの二部分を別けて前者を「奥武蔵」後者を「外秩父」と呼ぶ。しかもこの大石氏の分類は次第に普及しているそうである。」

6. 結び

本稿は活用できる資料に限りがあるなかでの帰納的な考察であり、その限界のうえで以下のように

13 埼玉県「埼玉県の自然公園」参照。

14 「初の県立自然公園－名称・地域決まる－」『飯能町メガホン』1951年3月15日参照。

まとめたい。

「奥武蔵」の語句は、武蔵野鉄道の観光施策で使われたことに始まる観光用の造語である。語源は武蔵野鉄道の名に由来し、その終着という意味であろう。吾野線の開業とともに、「奥武蔵野」が表す飯能駅周辺地域から「奥武蔵」で表される吾野周辺地域へと「奥」が移ったことがその傍証である。

「奥武蔵」の語句の創出は、昭和4年（1929年）吾野線の開業後である。飯能町の観光地を「奥武蔵野」と表現した時期があったが、昭和9年（1934年）の「奥武蔵スキー場」開業ころには吾野周辺を表す語句として「奥武蔵」が武蔵野鉄道によって成立していた。

「奥武蔵」の語句は昭和30年代初頭ころでも一般化していなかったものの、登山家やハイカーの間では戦前から広まっていた。「奥武蔵」は吾野線開通によって創出された語句であることからその沿線を狭義の「奥武蔵」とすれば、登山家やハイカーの間の「奥武蔵」は現在よりも広域で武蔵野鉄道沿線と東武東上線沿線、さらに秩父も含んでいた。その原因には、武蔵野鉄道の自社バスの運行による秩父への観光誘導と東武鉄道との連携が関係していたとみられる。

昭和26年（1951年）3月9日「埼玉県立奥武蔵自然公園」指定域は、西武電車沿線の山々を指す狭義の「奥武蔵」の範囲であったが、これによって「奥武蔵」は埼玉県の自然公園として認定された。

昭和20年代半ばから顕在化する西武鉄道と協調した飯能町の観光地化施策とともに、西武電車沿線の山々が「奥武蔵」として一般的に認識されていったとみられる。昭和31年（1956年）9月30日には吾野・東吾野・原市場の3村が飯能市と合併し¹⁵西武吾野線沿線を市域で包括したことも、西武鉄道と協調した「奥武蔵」の認知に好影響を与えたと推測される。

一方、東武東上線沿線の山間部は「埼玉県立奥武蔵自然公園」に含まれず、東武鉄道の観光地「外秩父」として分離する。秩父も「埼玉県立奥武蔵自然公園」に含まれなかった。これら「奥武蔵」の認知については本稿の外としたい。

ところで、「奥武蔵」の語句は地名でないことから、地元では地域を統合する用語として見出せる。例えば昭和27年（1952年）に第1回が開催された「奥武蔵駅伝競走大会」は、飯能町～高麗村～東吾野村～吾野村を通過する大会であった¹⁶。また、本稿「1. 「奥武蔵」の語句の現状」で触れた「奥武蔵創造学園 飯能市立奥武蔵小学校」も小学校3校を統合した校名である。「奥武蔵」の語句の地元定着については、あらためて考察する必要があるだろう。

- ・本文中は「～年代」を除き引用を含めて元号と西暦を併記し、数字は固有名詞を除きアラビア数字に置き換えた。
- ・観光案内パンフレット類は同名で異なるものが少なくないため、タイトルと画像を併記した。

15 飯能市史編集委員会（1988）『飯能市史 通史編』参照。

16 飯能市体育協会・飯能陸上競技協会（2001）『道はつづく 奥武蔵駅伝競走大会50周年記念誌』参照。

参考文献

- (1) 浅見徳男 (2009) 『飯能の住民が燃えた時－武蔵野鉄道と観光開発－』文化新聞社, pp.73－74.
- (2) 飯能市史編集委員会 (1986) 『飯能市史資料編Ⅺ 地名・姓氏』飯能市.
- (3) 埼玉県「埼玉県の自然公園」埼玉県ホームページ
(<https://www.pref.saitama.lg.jp/a0508/shizenkouen/midorishizenka.html>, 2020年11月22日閲覧).
- (4) 飯能市教育委員会 (2018) 「奥武蔵創造学園奥武蔵小学校・奥武蔵中学校設置に係る基本方針」平成30年7月
(平成30年10月一部改正).
- (5) 岳朋会 (1969) 『奥武蔵』(山と高原地図シリーズ25) 昭文社, p.2.
- (6) 坂倉登喜子 (1964) 「奥武蔵からヒマラヤへ」『新ハイキング』(109), p.20.
- (7) 神山弘・新井良輔 (1984) 『増補ものがたり奥武蔵 伝説探訪二人旅』金曜堂出版部, pp.182－183, 252－253.
- (8) 岩崎京二郎 (1964) 「奥武蔵の範囲」『奥武蔵研究会「奥武蔵」十五周年(100号)記念号』(100), p.15.
- (9) 「山郷雑記」『文化新聞』1952年2月28日.
- (10) 山田勇雄 (1915) 『武蔵野鉄道案内』大日本交通協会出版部, p.73.
- (11) 武蔵野電車「奥武蔵野 遊覧コース御案内」.
- (12) 飯能市立図書館蔵「八高線・武蔵野鉄道資料」(コピー資料).
- (13) 地図 (1932－1933と推定)「消火栓之位置」.
- (14) 武蔵野電車「飯能 天覧山」.
- (15) 飯能市郷土館 (2015) 『西武鉄道飯能池袋間開通100周年記念特別展武蔵野鉄道開通』飯能市郷土館.
- (16) 武蔵野電車「奥武蔵の雄 伊豆ヶ岳 奥武蔵の峠」.
- (17) 大石真人 (1999) 「研究会五十周年を祝う」『「奥武蔵」奥武蔵研究会創立五十周年記念号』(310), p.2.
- (18) 西武電車 (1962) 「奥武蔵ハイキング」('62年版(37年2月)).
- (19) 武蔵野電車「秋は武蔵野電車で」.
- (20) 武蔵野電車「奥武蔵ハイキング 正丸峠ドライブウエー」.
- (21) 武蔵野を探る会会報 (1936) 「開かれた“文化の障壁” 正丸峠開通祝賀会」『むさしあぶみ』(27).
- (22) 「祖国の史を訪ねて ハイキング 健康と鍛錬 東上線 池袋から」.
社名はないが東武鉄道製作と推定. 連絡バスの案内から, 東武鉄道と武蔵野電車が協力したパンフレットである.
- (23) 坂倉登喜子 (1946) 『奥武蔵』山と溪谷社, pp.4－5.
- (24) 「初の県立自然公園－名称・地域決まる－」『飯能町メガホン』1951年3月15日.
- (25) 有竹修二 (1955) 『武蔵野散歩』奥武蔵研究会, p.6.
- (26) 飯能市史編集委員会 (1988) 『飯能市史 通史編』飯能市, p.420.
- (27) 飯能市体育協会・飯能陸上競技協会 (2001) 『道はつづく 奥武蔵駅伝競走大会50周年記念誌』飯能市体育協会・飯能陸上競技協会, p.24.

Birth of “OKUMUSASHI”

KATOH Hiroyuki

Abstract

The name “OKUMUSASHI” is presumed to have been created by MUSASHINO Railway. In the early days, HANNO area was called “OKUMUSASHINO”. When MUSASHINO Railway extended to AGANO, “OKUMUSASHI” changed from HANNO area to AGANO area. And the bus service to CHICHIBU expanded the area of “OKUMUSASHI”. Mountaineers and hikers have expanded the area of “OKUMUSASHI” to include mountains along TOBU-TOJO Line. In 1951, “SAITAMA Prefectural OKUMUSASHI Nature Park” was established. The area of “OKUMUSASHI” was limited to the area along SEIBU Railway.

Key words : OKUMUSASHI, MUSASHINO Railway, SEIBU Railway, HANNO, AGANO